

平成21年9月16日

「第6回文化庁映画週間 - Here & There」について

文化庁では、魅力ある総合芸術であり、かつ海外への日本文化発信の有効な媒体である日本映画の振興に、さまざまな観点から取り組んでいます。その一環として、映画をあらゆる角度から取り上げる「文化庁映画週間」を東京国際映画祭期間中に開催し、映画に関わる多くの方々に映画祭に参加いただく機会を提供しています。今回、6回目となる「文化庁映画週間」は、優れた文化記録映画作品および永年にわたり日本映画を支えてこられた方々を顕彰する「文化庁映画賞贈呈式」や受賞作品による「受賞記念上映会」をはじめ、映画が持つ魅力を幅広く伝える「映画人の視点 Director's Angle/Actor's Angle」、国内外の映画人による各種「コンベンション」を実施します。（東京国際映画祭事務局同時発表）

1. 会期 平成21年10月17日（土）～10月23日（金）
2. 場所 六本木ヒルズ、シネマート六本木（港区）
3. 主催 文化庁／財団法人日本映像国際振興協会（ユニジャパン）
4. 共催 一般社団法人コミュニティシネマセンター
特定非営利活動法人ジャパン・フィルムコミッション
5. 実施事業の概要
別紙参照

文化庁文化部芸術文化課
課長 清水 明（内2822）
調査官 佐伯 知紀（内2829）
担当係長 藤澤 和寛（内2083）
【代表】03-5253-4111
【直通】03-6734-2083

(別紙) 実施事業の概要

平成21年度(第7回)文化庁映画賞贈呈式及び受賞記念上映会・・・P3

(主催/文化庁)

【贈呈式】

日程：10月17日(土)

会場：六本木ヒルズ「グランドハイアット東京」2F

優れた文化記録映画作品を顕彰する文化記録映画部門および永年にわたり日本映画を支えてこられた方々を顕彰する映画功労部門の贈呈式を実施します。

【受賞記念上映会】

日程：10月18日(日)

会場：シネマート六本木1

文化記録映画部門受賞3作品の受賞記念上映会を実施します。

映画人の視点 Director's Angle/Actor's Angle

(主催：文化庁、ユニジャパン)

日程：10月21日(水)～23日(金)

会場：TOHOシネマズ六本木ヒルズ7

昨年度より新たに加わり、好評を博した本企画。今年はさらに「Actor's Angle」と題して、日本を代表する俳優にもスポットを当て、監督・俳優自身に映画について語っていただくのと同時に、多彩なゲストの登場や監督・俳優が推薦する作品のオールナイト上映を行います。

第7回文化庁 全国フィルムコミッション・コンベンション

(主催：文化庁/共催：ユニジャパン、ジャパン・フィルムコミッション)

日程：10月22日(木)

会場：アカデミーヒルズ49「オーディトリウム」

実写の映画やテレビに限らず、アニメーションも監督と作画クリエイターはイメージを共有するためにロケーションハンティング(ロケハン)を行い、「正確な情報」として“風土”や“伝統”をリサーチすることによって、リアルなロケーションとアニメーションの融合を作り出します。緻密な背景画の創作プロセスに隠されたメイキング(ロケハン)と場所(地域)の関係性を監督やクリエイター陣に語ってもらいます。

(※「ジャパン・ロケーション・マーケット2009」との共同企画)

第6回文化庁全国映画祭コンベンション

(主催：文化庁／共催：ユニジャパン、コミュニティシネマセンター)

日程：10月23日(金)

会場：アカデミーヒルズ49「オーディトリウム」

映画がコミュニティ形成においてどのように関係しているかについて、多彩なゲストによるディスカッション等を行います。

(参考) 第22回東京国際映画祭開催概要

期間：平成21年10月17日(土)～10月25日(日)9日間

会場：六本木ヒルズ、シネマート六本木等

企画内容に関する詳細お問い合わせ先

ユニジャパン(財団法人日本映画国際振興協会) TEL 03-3524-1081 FAX 03-3524-1087

※文化庁映画賞贈呈式及び受賞記念上映会の詳細

平成21年度（第7回）文化庁映画賞贈呈式及び受賞記念上映会

文化庁では、我が国の映画の向上とその発展に資するため、文化庁映画賞として、優れた文化記録映画作品（文化記録映画部門）及び永年にわたり日本映画を支えてこられた方々（映画功労部門）に対する顕彰を実施しています。

文化記録映画部門では、選考委員会における審査結果に基づき、次の3作品（文化記録映画大賞1作品、文化記録映画優秀賞2作品）を受賞作品として決定しました。各作品の製作団体に対して、文化庁映画賞として賞状及び賞金（文化記録映画大賞200万円、文化記録映画優秀賞100万円）が贈られます。

また、映画功労部門についても次のとおり7名の方を受賞者として決定し、それぞれ文化庁長官から文化庁映画賞が贈られます。

【贈呈式】

日 時 平成21年10月17日（土）19：30～
会 場 六本木ヒルズ「グランド ハイアット 東京」2F コリアンダー

【受賞記念上映会】

〈文化記録映画部門受賞作品〉

日 時 平成21年10月18日（日）
10：50～「平成熊あらし～異常出沒を追う～」
13：20～「風のかたちー小児がんと仲間たちの10年ー」
16：20～「嗚呼 満蒙開拓団」
会 場 シネマート六本木1

【平成21年度（第7回）文化庁映画賞受賞一覧】

＜文化記録映画部門＞

文化記録映画大賞	作品名	嗚呼 満蒙開拓団
	製作団体名	株式会社 自由工房
文化記録映画優秀賞	作品名	風のかたち－小児がんと仲間たちの10年－
	製作団体名	いせFILM
	作品名	平成熊あらし～異常出没を追う～
	製作団体名	株式会社 群像舎

（作品名50音順）

【文化記録映画部門贈賞理由】

『嗚呼 満蒙開拓団』監督：羽田 澄子 2008年／120分

口当たりの良い国策に押し出され、やがて敗走する日本軍に置き去りにされた開拓移民・約27万人が迎えた戦後を、多くの人々の証言から克明に描き出した労作。広野を必死に逃げ、大切な家族を失い、数十年も故郷に帰れなかった人々の思いをしっかりと受け止めていく構成、作者自身の目と耳と足を駆使して現地の風土を一步ずつ確かめていく展開は、口当たりの良い歴史解釈が束になっても敵わない、百聞に勝る「発見」に満ちている。＜清水 浩之＞

『風のかたち－小児がんと仲間たちの10年－』監督：伊勢 真一 2009年／105分

本作は、10年に亘る長期記録。10年のあいだには、病から回復し美しく成人して、看護師を志すひともしれば、母となるひともある。＜亡くなった子のひとりひとりの経験が僕をつくった＞という医師がいる。ひとりひとりのイメージを美しく立たせる編集の妙。『奈緒ちゃん』以来、子どもたちの生を見つめ続けた作り手の取材経験が生きている。長期取材ものに優れた作品が多かった本年の諸作品のなかでも、優れた一本である。＜大久保 正＞

『平成熊あらし～異常出没を追う～』監督：岩崎 雅典 2009年／61分

岩波映画製作所で主に野生動物の記録映画を手がけ、今や群像舎の代表として野生動物ドキュメンタリー作品を作り続ける岩崎雅典監督の手腕に感服せざるを得ない秀作だ。2006年に熊が大量出没したことに疑問を抱いた岩崎監督が、2年に渡り軽井沢近郊に棲むツキノワグマを追い、マタギの継承者がなく生態系が崩れているところまで迫る対象への丹念な迫り方よ！『マタギ又鬼』（82）から27年、粘り強さと演出に磨きが増すばかりだと敬服。＜寺本 直未＞

※＜ ＞内は執筆した選考委員名

＜映画功労部門＞

氏 名	年 齢	分 野
大橋 鉄矢（おおはし てつや）	8 2	映画録音
窪田 治（くぼた おさむ）	6 2	映画装飾
久米 光男（くめ みつお）	8 3	映画照明
園井 弘一（そのい こういち）	6 6	映画編集
中澤 敏明（なかざわ としあき）	6 2	映画プロデュース
原 一民（はら かずたみ）	7 7	映画撮影
福田 慶治（ふくだ けいじ）	6 9	映画振興

（敬称略・氏名50音順）

【映画功労受賞者功績】

大橋 鉄矢

昭和20年代に映画録音の世界に入り、亀井文夫監督の「流血の記録 砂川」、勅使河原蒼風監督の「蒼風とオブジェ いけばな」（昭32）などのドキュメンタリー映画で繊細な録音技法を発揮し信頼を得た。後に戦後の記念碑的な作品といわれる「東京オリンピック」（昭40）にも参加している。劇映画に転じてからは、新藤兼人監督の「人間」（昭37）「悪党」（昭40）「本能」（昭41）「裸の十九才」（昭45）などの独立プロ作品で腕を奮う一方で、市川崑監督の「犬神家の一族」（昭51）「細雪」（昭58）「鹿鳴館」（昭61）などの大作においても、経験と技術を生かし作品の成功に貢献した。また、「音」に対する真摯な姿勢は、撮影現場からポストプロダクション、機器やスタジオのシステム設計にまで及んでおり、特にフィルムレコーディング（光学録音）に対する熱意と研究は、後輩技師たちに影響を与えている。毎日映画コンクール録音賞、日本アカデミー賞優秀録音賞等を受賞。

窪田 治

昭和43年に東映京都撮影所に関連する関西美工（後、創美に改称）に入社。溝口健二作品の装飾担当として知られる荒川大の助手を務める機会に恵まれ（「桜の代紋」昭48）、その仕事に打ち込む厳しい姿に打たれる。「トラトラトラ」で黒澤明監督の演出をかいま見る。以降映画・テレビ作品の装飾一筋に打ち込み今日に至る。美術監督、西岡善信（「極道の妻たち」昭61）、井川徳道（「人生劇場」昭57）の諸作品を担当し、なかでも井川の「わが愛の譜 滝廉太郎物語」（平5）では、セット

に組み立てられたドイツ風の高い天井、大きな窓、それにマッチするカーテンの手配に心を砕いた。一貫して映画美術を支え匠の技を発揮しつつ、後進の育成に尽力している。他の作品に「野獣刑事」(昭 57)「里見八犬伝」(昭 58)「バルトの楽園」(平 17) など。最新作は来年公開の三池崇史監督の「十三人の刺客」。

久米 光男

昭和 21 年に東宝撮影所照明課に入社。同 25 年退社。以降フリーとなり、同 33 年記録映画「炭鉱の子」で照明技師となる。主な作品は勅使河原宏監督の「砂の女」(昭 39)「他人の顔」(昭 41)、「トップ・ジーゴのボタン戦争」(市川崑 同 42)「十六歳の戦争」(松本俊夫 同 48)、特に市川崑監督とは劇映画・CM「サントリーレッド」他多数を手がけている。各社の照明助手が技術研究と交流を図るための、映画照明新人協会の設立に尽力し今日の映画テレビ照明協会の礎を築いた。同 55 年映像職能連合役員、同年日本アカデミー賞協会運営委員に就任今日に至る。

園井 弘一

昭和 38 年に京都映画に入る。編集助手としてついた小林正樹監督の名作「怪談」(同 40)に感銘を受ける。同 50 年フリーとなり、主に時代劇を中心に活躍。なかでも、テレビ、映画でヒットした「必殺シリーズ」において示した歯切れの良い、スピード感溢れるカットリングは評価が高い。主な作品に「典子は、今」(松山善三 同 56)「必殺！」(貞永方久 同 59)「必殺！Ⅳ 恨みはらします」(深作欣二 同 62)「必殺！Ⅴ 黄金の血」(舛田利雄 平成 3)「四谷怪談 忠臣蔵外伝」(深作欣二 同 6)「良寛」(貞永方久 同 9)「花のお江戸の釣りバカ日誌」(栗山富夫 同 10)「おもちゃ」(深作欣二 同 11)、近作に「憑神」(降旗康男 同 19) など。

中澤 敏明

昭和 44 年、三船敏郎が主宰する三船プロダクション入社、同ドイツ支社長を務めた後、同 56 年退社。セゾングループ映像部長を経て、平成 7 年にセディックインターナショナルを設立。規模の大きいメジャー系から低予算のインディペンデント系まで、時代のニーズを捉えた幅広く意欲的なプロデュースを続け、映画界に新風を吹き込んだ。邦画の主要各賞を独占し、米国アカデミー賞外国語映画賞を受賞した「おくりびと」(滝田洋二郎 平 20)のプロデューサーとして知られる。主な作品に「無能の人」(竹中直人 同 3)、「岸和田少年愚連隊」(井筒和幸 同 8)、「NANA」(大谷健太郎)「蝉しぐれ」(黒土三男 平 16)、アニメーション映画「あらしの夜

に」(杉井ギサブロー 平 17)、「日本沈没」(樋口真嗣)「スキヤキ・ウエスタンジヤンゴ」(三池崇史 同 19)「闇の子供たち」(阪本順治 同 20)。現在来年公開の「座頭市 The Last」(阪本順治)「十三人の刺客」(三池崇史)を製作中。

原 一民

昭和 28 年東宝撮影所撮影部に入り、同 43 年テレビドラマ「追いつめる」(山本迪夫)で初の撮影を担当、翌年の同 44 年西村潔監督の「死ぬにはまだ早い」で映画撮影監督に起用される。同 46 年「誰のために愛するか」(出目昌伸)で日本映画撮影監督協会より新人賞として三浦賞を受賞した。その後も今井正、増村保造、神代辰巳監督らと組み多くの作品を撮る。また、東京工芸大学、日本大学芸術学部で講師を務めるなど後進の育成に尽力している他、日本映画・テレビ協会の映像技術審査員も務めている。他の主な作品に、出目監督の「神田川」(昭 48)「きけ、わだつみの声」(平 7)「バルトの楽園」(平 17)、今井監督の「あにいもうと」(昭 51)「ひめゆりの塔」(昭 57)、杉田成道監督「優駿」(昭 58)、橋本幸治監督「ゴジラ」(昭 59)、撮影協力作品に黒澤明監督の「夢」(平元)。日本アカデミー賞優秀撮影賞、日本映画テレビ技術協会技術賞、奨励賞等を受賞。

福田 慶治

昭和 38 年に日活に入社し製作畑を歩む。担当作品に「戦争と人間 第一部」(山本薩夫 昭 45)「陽は沈み陽は昇る」(蔵原惟繕 同 49)など。同 51 年に日活を退社し、日本シナリオ作家協会事務局長に就任する。同 59 年からはフリーのプロデューサーとして、テレビでは「あぶない刑事」シリーズ、映画では大林宣彦監督の「青春デンデケデケデケ」(平 4)などを製作した。平成 7 年からは(社)日本映画製作者連盟事務局長(専務理事)、(社)映画産業団体連合会事務局長に就任、平成 18 年からは(財)日本映像国際振興協会理事・事務局長を務めるなど団体の要職を歴任して映画・映像分野の振興に尽力した。

<参考>

平成21年度文化庁映画賞選考委員

【文化記録映画部門】

大久保 正	映像研究家
清水 浩之	ゆふいん文化・記録映画祭コーディネーター
寺本 直未	映像制作・文筆家
福井 康雄	短編映像プロデューサー
山名 泉	社団法人日本映画テレビ技術協会編集委員
山本 克己	映像評論家
吉原 順平	映像・展示プランナー

【映画功労部門】

華頂 尚隆	社団法人 日本映画製作者連盟 事務局長
黒井 和男	シネマ・インヴェストメント株式会社 代表取締役会長
小藤田千栄子	映画・演劇評論家
出川 三男	協同組合 日本映画・テレビ美術監督協会 理事長
前田 米造	撮影監督

(敬称略・氏名 50 音順)

(問合せ先：文化庁 TEL 03-6734-2083)